

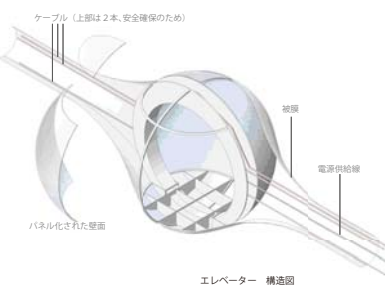
□ 建築物語のある章

タイムラグはなぜおこるのか？高度情報化社会がもたらした実体のないやり取り、これが社会変化のサイクルを加速させた。

例えば、居住地区・都心回帰の問題は目先の目的として一瞬の流行をつくり出しても、社会変化のサイクルの早さについていけず、開発が完成する頃には、もはや必要のない物へと変っている場合もある。結局、マンションは売れ残り、経済悪化に拍車をかける。そもそも建築のストックがあり、それらを使用すれば良いのだが、それ自体も問題を抱えている。例えば面積極的な話や同一ビル内では借りられない、連続したフロアでは借りられないなど。さらにはビルからビルへの移動は時間がかかる。

この問題についての解の一つはビル同士を結ぶことだが、一見単純で何の問題もはらんでいないかのように思えるこの解法も、実は前述の事柄とは矛盾している。それはつないだその空間自体もそれぞれ流転の運命にあるということだ。社会変化に敏感に反応してしまふ、需要・プログラム・経済性から逃れられない建築群を扱うために、永続性よりも一時性を重んじて、柔軟なエレベーターを提案したい。

このような背景から、この計画は始まった。



□ Temporary

この提案を一言で言い表すならば、“仮設エレベーター”である。しかし、その聞き慣れた単語の組み合わせとは裏腹に、そのシステム・形態・社会的影響は今までのエレベーターとは異なる。

まず、この提案を行う上での条件は、

第一に、この動線が垂直や水平と言ったグリッド状の軸性にとらわれることなく空間を移動すること。

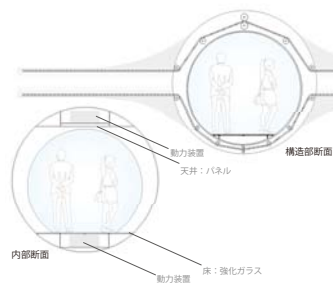
第二に、永続的に存在するとは限らないため、施行や解体をいかに容易にしたかということ。

第三に、仮設性を持つため、再び使用可能のようにユニット化及び、どのような場所にも適応可能な部材構成にすること。

第四に、既存建築との接点がどの建築とも適応可能であること。

第五に、仮設的ではあるが設置期間が定まっていなかったため、永続的な使用にも耐えうるデザイン性を持ち得ること。

以上の条件をクリアし、この計画は成り立っている。



□ System

前述の条件から、カゴとなる部分は方向性を極力持たない方が好ましいため、カゴは球形とした。そして、建築物間をケーブルで結びその間をカゴが自らの動力で進む。そしてそれらを保護皮膜としてストレッチ素材で包む。乗り降りには建築壁面に取り付けられた専用のフレームに入る形で行う。

球形の人が乗る部分の壁面は、4枚の亚克力で構成され、それぞれエレベーター設置時に、亚克力のみか、扉付きのパーツを選んで構成することが可能である。これによって、連結する建築空間同士を結んだ角度に関係なく一つのカゴのタイプで全てをまかなうことができる。このカゴの上下には動力装置があり、それによりケーブルを伝っていく。カゴ内部は床下から照明で照らされ、カゴ上下の部分とともに、カゴ外部を照らす。

保護皮膜のストレッチ素材は、弾力性、耐久性、防水性、透光性がある物を使用する。

Near-topia

— 社会変化と建設のタイムラグを埋める —

都市が完成することはない。

それは都市が都市たる理由であり、都市の魅力である。

都市は、その時代の要求と欲望を糧にして、加速度的に、ダイナミックに変貌していく。

2030年、社会はより高齢化を迎えるであろうが、そのときに必要な都市インフラは社会の速度についていけているだろうか？

携帯電話、インターネット、もはや社会を構成するツールは可視化できる物理的な速度を超えてしまった。

その速度が加速していくに伴い、社会変化の速度も増し、2030年には建築の生成速度と社会変化に大きなタイムラグが生まれてしまっているだろう。

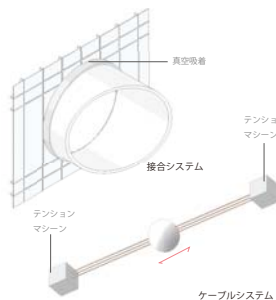
そこで、仮設的なエレベーターを提案する。これは、インフラと建築の社会変化に対する速度差を緩和する装置だ。

それはユートピアを描くことでも、ディストピア的な警鐘でもない。決して達成することのできないユートピアへ近づくための提案である。

□ System 2

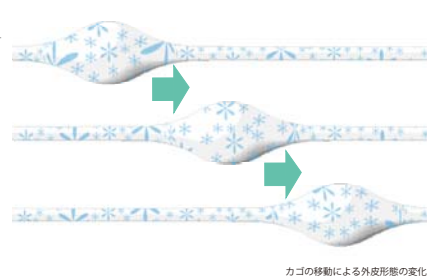
建築壁面につくエレベーターの乗降場はどの建築にも転用可能なようにしなければならない。そこで、この乗降場は接着面が柔らかいゴムあるいはそれと同様な気密性と柔軟性を備えた素材でつくられていて、その接着部分と建築との間を真空にして建築に寄生する。円筒状の切り口が斜めにカットされているのは、どんな角度においてもカゴと乗降場が接合可能にするためである。

このエレベーターの基本的な構造は建築内部にケーブルのテンションを維持するための機械があり、それにつながれケーブルをカゴが自らの動力で進むというものである。このテンションをかける部分が一番荷重がかかるため建築の既存構造物に寄生し、構造を維持する。



□ Circulation

この仮設エレベーターは、建築という臓器をつなぐ人工血管の様な物で、実際に都市に漠然としたものではなく、ヒューマンスケールでの“循環”をつくり出す。都市の中で循環するものは人であり、その人間の循環が都市をよりダイナミックに、刺激的にする。もしも、向かい合ったビル間の移動、あるいは隣接するビル間の移動が企業や個人レベルで可能になったら、社会変化による建築とプログラムの予期せぬずれや、建設によるタイムラグをより和らげることができるようになる。この提案は、外部被膜としてストレッチ素材を選択したことで、日中は人の循環がカゴの移動による膜の形態変化で可視化され、夜はストレッチ素材の透光性により都市を照らし出し、眠らない都市のダイナミクスがにじみ出る。



□ Variety

外皮に膜を使用したことによる利点の一つに、外皮に多様な表情をつけることができるということがある。

あるエレベーターでは模様を描き、ある場所では写真をプリントし、また別の場所では文字をプリントする。これは新たな広告媒体としても利用できるポテンシャルを持っている。ロゴ・写真・メッセージ・・・膜はかえることも可能なため、ある期間だけのキャンパスの貸し出しや、季節ごとのセールスの告知等、普通のポスターのような役割を持つこともできる。

